

## 日本の分水嶺

著者：堀 公俊  
発刊：山と溪谷社  
定価：990 円（税込）



「分水嶺」は、文字どおり“水を分ける嶺”である。

河川に携わったことがある読者なら、「流域界」の方がなじみがあるかもしれない。河川の計画や管理を行う上では、どこに降った雨がこの川に流れ込んでくるのか、を常に意識することになる。

ヒトやモノが移動する場合、「分水嶺」は難所となることがある。古くから街道を歩いたり、馬に乗ったりして、「分水嶺」の峠を越えてきた。近代になり、鉄道や道路を整備する際も、「分水嶺」をどのようなルートで、どのような縦断勾配で越えるのか、重要なポイントとなってきた。インフラの整備・管理に携わる者にとって、「分水嶺」とは無縁ではられない。

「分水嶺」は、水が流れていく境目であるが、「分水嶺」を境にして気候、文化、風土、言葉（方言）、生活スタイルが異なることも多い。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」は川端康成の小説「雪国」の書き出しである。主人公は国鉄上越線を列車で「分水嶺」のトンネルを抜ける。手前は群馬県（上野国）であり、利根川流域。関東平野を流れて太平洋へ

と注ぐ。行く手は新潟県（越後国）で、信濃川流域。新潟平野を流れて日本海へと注ぐ。冬になると、太平洋側は晴天だが、日本海側は降り積もる雪に囲まれて生活することとなる。上越線はループを描きながら高低差を克服している。技術の進展に伴い、その後に整備された上越新幹線や関越自動車道は、平面・縦断線形がずいぶん改善されてきた。

「分水嶺」が急峻な山地ばかりかという、そうでもない。例えば、兵庫県丹波市には、日本海へ流れる由良川流域と瀬戸内海に流れる加古川流域の「分水嶺」があるが、最も低いところで標高95mである。平坦に近い地形で、意識しなければ、「分水嶺」とは気が付かない。

本書は、太平洋と日本海を分ける「中央分水嶺」を中心に全国128の物語が掲載され、「分水嶺」が作り出した興味深い話題や身近な疑問を取り上げている。本書と地図を手元に置いて、近くの「分水嶺」やまだ訪れたことがない「分水嶺」を楽しんでみてはいかがだろうか。日本の国土を違った目で見ることができるのではないだろうか。